

# 中学校における防犯意識を高める研究 —自助・共助・公助の視点を用いた開発的防犯教育を通して—

教職実践応用領域 学校づくり履修モデル  
野々山 毅

## 序章 研究課題の設定

### 第1節 はじめに

本研究を進めるにあたり、大きな障害となったのが紛れもなく、新型コロナウイルス感染症の広がりである。未曾有の危機に瀕した中で、学校は休校措置がとられ、教員・子ども・保護者は病気の心配だけでなく、学校での学びがどうなっていくのかという心配にまで広がっていった。本研究は当初、校内の全学年・教員・保護者・地域のすべてを巻き込む予定であったものの、感染予防のもとで保護者と地域については関わりを大幅に減少させることになった。また、子どもへの実践も中学3年のみを対象とする形で縮小して進めることとなった。コロナ禍により他者との関係性が薄まる中でも、子どもと教師に対して防犯意識を高める研究を行った。

### 第2節 研究の目的

近年、子どもが被害者となる犯罪事件がおきており、1999年の京都市立日野小学校、2001年の大阪教育大学附属池田小学校、2003年の宇治市立宇治小学校における事件は、誰もが一度は耳にしたことがあるであろう。こういった殺傷事件の発生により、これまでの疑うこともなかった学校の中は安全という、安全神話は崩れ去った。これ以降も残念ながら、子どもが連れ去られたり、不審者が学校侵入に侵入したりする事件が毎年発生しているのが現状であり、学校を含め、自宅、地域のどこにいても、子ども自身が身を守る力を身に付けなければならない状況にある。そして、その被害者となっているのは、小学生が多いものの、中学生も含まれている。

中学生であれば、小学生よりも身体能力や社会性の向上により、できることは増えているであろう。では、どのような力を身に付けさせるべきなのか、教師はどのようなことを教えていけばいいのだろうか。

本研究では、安全教育の中でも「防犯」にしばり、子どもに対して身につけさせたい力を明確にしてい。そして、子どもだけではなく、安全教育を実施する側の教師や講師として関わる地域に対しても、防犯意識の高まりを期待していく。

### 第3節 研究の意義

本研究は、中学3年生という発達の状況に合わせたカリキュラムによって予防のスキルと知識を身に付けさせ、子どもと教員の防犯意識を高めるための研究である。

学校と地域は子どもを守りたいという共通の思いをもっている。しかし、大きな犯罪や事件が起きていない現状があることで、高かった意識に油断が生まれてしまう。この油断が大きな被害につながったのが、東日本大震災である。石巻市立大川小学校では、震災により教員・子どもの生命が失われ、被害を拡大したことに対して訴訟が起こされた。判決では、市と県に事前防災の不備が指摘され、学校へは危機管理マニュアルの改訂義務を怠ったと指摘され、学校現場の安全管理責任が浮き彫りとなった。子どもたちの生命を守るために、学校・教師は子どもの安全を守る責任を果たし、子どもに対しては安全教育を実施しなければならない。

これまでに多くの安全教育が実施されてきた。その中で「防犯」に関わる研究は、小学校を対象としたものが数多く行われてきている。その一方で、中学校を対象とした研究は少ない。また、予防や対処に終始する実践ではなく、開発的な視点を取り入れた研究は生徒指導において必要性が高いと考える。さらに、現任校の位置する地域においても、近年では中学校での防犯教育はほとんど行われていない現状がある。本研究では、本校での安全教育カリキュラムを整備していく。これは本校だけでなく、他校・他地域でも大いに役立つと考えられる。

#### 本研究の理論的・実践的価値

- ・ 中学校を対象とした研究の蓄積が少ない点
- ・ 予防・対処だけでなくとどまらず、開発的な視点は、実践的価値として必要性が高い点
- ・ 安全教育カリキュラムは他校での転用が可能である点

### 第4節 研究の全体構造図

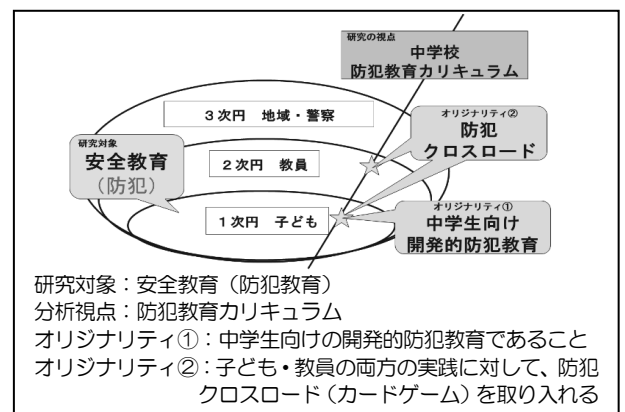


図1 研究の全体構造図

本研究の全体構造図が図1である。1次円を子ども、2次円を教員、3次円を地域・警察として、中学校の防犯教育カリキュラムの視点から開発的防犯教育について明らかにしようとしたものである。

## 第1章 理論研究

### (先行研究の総括・事例研究について)

#### 第1節 勤務校の実態分析 SWOT 分析

勤務校の実態分析として、職員に自分自身・生徒・教師・保護者地域の強みと弱みについてのアンケートを行い、結果をまとめたものが以下の表1である。この結果から読み取ることができるもののうち、生徒については、主体性の向上が必要であることがあり、教師については、強みとしては小規模校の良さを生かしていること、職員同士の協力体制があることがあり、弱みとして防犯体制と危機意識の不足が挙げられる。保護者・地域は学校の活動に協力的であることが強みである一方で、安全管理が行き届かないという弱みもあることが明らかとなった。

表1 勤務校のSWOT分析

	生徒	教師	保護者・地域
強み (Strength)	・生徒間のつながりが強い のびのびとしつつも、規律がある	・職員数が少ないので、共通理解・情報伝達早い。 ・職員が生徒のほぼ全員の名前・性格・抱えている問題を把握できる。 ・職場では発言しやすい雰囲気があり、温かい。	・保護者や地域の方などが学校を身近に感じている。 ・学校とともに子どもを見守る雰囲気がある。
弱み (Weakness)	・けじめがない ・他人のせいにして自分自身に向きあわない ・小学校からの防犯教育の不足	・穏やかさゆえに危機意識に欠ける部分がある。(行事の教員配置・避難訓練・不審者侵入) ・不審者侵入への対応に不安感がある。 ・何となくで流されることが多い。	・資源回収など休日に外からの出入りがあり、来校者を管理しきれない。

#### 第2節 防犯教育の推進

##### (1) 中学校学習指導要領上の防犯教育の位置づけ

中学校学習指導要領上での防犯教育の位置づけでは、安全教育という大テーマが総則編の中に書かれており、この安全教育を細分化した内容が「生活安全」「交通安全」「災害安全」となっている。本研究の防犯教育は生活安全の中に含まれている。

##### (2) 国・県の取組

防犯教育についての国の取組として、文部科学省が平成30年6月に登下校時の子供の安全確保に関する関係閣僚会議の中で、登下校の防犯プランを発表した。この中では、下校時に子どもが被害者となる事件の発生が多いことから、地域の連携の強化が求められている。そして、学校教育に対しては防犯教育の充実などの危機回避に関わる力を身に付けることを求められている。

愛知県の取組として、学校安全マニュアルの作成が挙げられる。学校安全の実現のために、組織活動をもとにして「安全教育」と「安全管理」をすすめていく方針が出された。

- ・「学校安全委員会」の設置

- ・教科教育の中の「安全学習」の実施

例：保健体育、社会科

- ・校内の対物・対人の安全「管理」 など

#### (3) これまでの現任校の取組

研究に取り組む以前の現任校の取り組みをまとめると以下ようになる。

教員向けや生徒向けの安全に関わる取組は実施されているものの、「防犯」に限って見ていくと、取組が実施されていないことが分かり、防犯教育・防犯講習を実施する必要性が明らかとなった。

##### <できていること>

- ・学校安全委員会の設置
- ・学校保健委員会の設置
- ・生徒を対象とした学校保健委員会の実施
- ・避難訓練、集団下校訓練の実施
- ・校内施設の安全点検の実施

##### <できていないこと>

- ・対応マニュアルの形骸化
- ・防犯講習、防犯教室の未実施

#### 第3節 安全管理対策

##### (1) 危機管理マネジメント

危機管理とは、文部科学省(2006)『学校における防犯教室等実践事例集』の中で、「人々の生命や心身等に危害をもたらす様々な危険が防止され、万が一、事件・事故が発生した場合には、被害を最小限にするために適切かつ迅速に対処すること」とされており、これを図で示したものが、下の図3である。



図3 危機管理の2つの側面

文部科学省(2006)によると、危機管理は2つの側面をもっており、事前の危機管理（リスク・マネジメント）と事後の危機管理（クライシス・マネジメント）があることになる。事前の危機管理とは、事件・事故の発生を未然に防ぐことを中心とし、危険を発見、回避することに重点を置いている。事後の危機管理とは、事件・事故が発生した場合に、被害を最小限に抑え、その再発の防止と通常の生活の再開に向けた対策を講じることと述べられている。

また、文部科学省(2006)『学校における防犯教室等実践事例集』の中では、「学校の危機管理の対象としては、子どもへの犯罪行為、地震などの自然災害、食中毒を含む感染症、授業や課外活動における事故、通学中の交通事故など様々である。その中でも学校や通学

路における不審者による子どもへの犯罪行為は、危機管理の対象として非常に重大である」と書かれている。

## (2) リーダーシップ理論

リーダーシップ理論には、PM 理論をはじめいくつかの理論が提唱されている。本研究では、危機管理と関連が見られた河野 (2019) によるリーダーシップ理論に注目した。河野によると、「リーダーシップとは、個組織の構成員全員に必要な能力である」と述べられている。防犯のような緊急時においては、発生現場にいる教員が第 1 次的なリーダーとして判断・決断をする必要があり、すべての教員にリーダーシップが求められる。

## 第 4 節 防犯教育論

### (1) 自助・共助・公助とは

菅首相が所信表明演説 (2020 年 10 月 26 日) で「自助・共助・公助」という言葉を取り上げたことにより、一躍話題となったものであるが、もともとは社会保障についての考え方である。しかし、解釈は様々あり、その一部をまとめると以下の表ようになる。

厚生労働省 『厚生白書』 平成 12 年版	自助、共助、公助という言葉に表される個人、家庭、地域社会、公的部門など社会を構成するもの
厚生労働省 『厚生労働白書』 平成 20 年版 p6-7	「自助」国民一人一人が自らの責任と努力によって営むこと 「共助」国民が相互に連帯して支え合うことによって安心した生活を保障すること 「公助」自助や共助によっても対応できない状況に対し、必要な生活保障を行うこと
内閣府 『防災白書』 令和 2 年版 p40	「自助」自分と家族 「共助」近隣住民等 「公助」災害時の救急救命や人的・物的支援

この 3 つにおいても「自助・共助・公助」についての定義に違いがあることから、本研究では以下のように定義した。

自助・・・自分で自分の身を守ること  
共助・・・家族や友人などの自分と関わりのある人を助けること  
公助・・・地域住民などの自分と関わりの少ない人を助けること

### (2) 安全基礎体力とは

安全教育の目標である、あらゆる危機を回避し、乗り越えていく基本的な力を清永 (2008) は「安全基礎体力」と述べている。安全基礎体力とは、あらゆる危機から自他を守るために必要な力のことであり、成長段階において、家庭や学校、地域が補う必要がある。

安全基礎体力は 4 つの柱として体力、危機への知

恵・知識力、コミュニケーション力、大人力から構成されている (図 4)。大人力とは、大人のもつ危機回避能力として、図 5 のようにまとめられている。すなわち、危機をより早く発見し、様々な選択肢の中から、発見した際のよりよい行動を決定する能力であると言える。

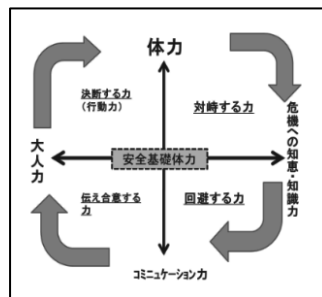


図 4 安全基礎体力

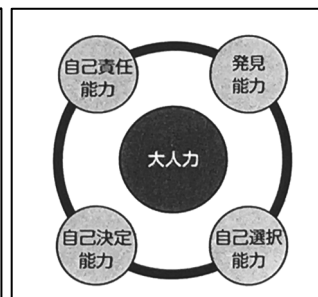


図 5 大人力

また、安全教育を通して、どのような子どもを育てるのかを示した、目指すべき子どもの姿として、「安全キッズ」を参考モデルとして紹介する (図 6)。

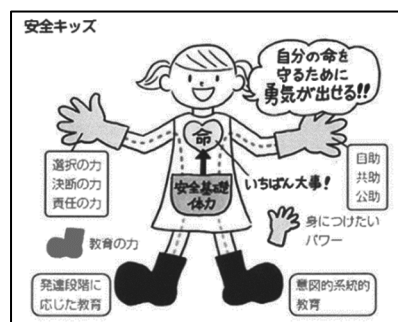


図 6 安全キッズ

清永の考えをまとめると以下ようになる。

- ・ 危機を察知し、回避するためには安全基礎体力が必要不可欠である。
- ・ 安全基礎体力を身に付けていくためには、発達段階に合わせた系統的な学習を進める必要がある。

### (3) リスク・コミュニケーション

緊急時の判断・決断を体験することは不可能であるものの、多様なリスクへの対応を「対話」をキーワードに主体的に考えるのがリスク・コミュニケーションという理論である (図 7)。

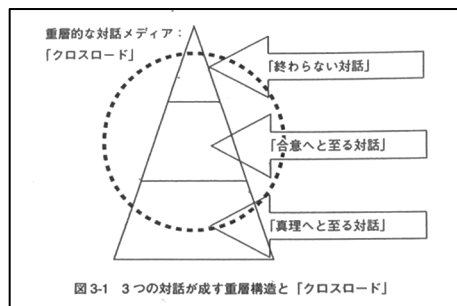


図 7 リスク・コミュニケーション

個々が正解 (「真理」) を作り出す対話が、他者の

関与や意見の共有により「合意」へ向かう対話となり、想定外（偶有性）との出会いにより「終わらない」対話に変化していくという対話の重層性を表している。

このリスク・コミュニケーションにおける対話メディアが「クロスロード」というカードゲームである。クロスロードは、矢守、吉川、網代（2005）により1995年の阪神淡路大震災での神戸市役所の職員が実際に体験したジレンマをもとに作られた災害対応ゲームである。このゲームでは、設定された問いに対して、参加者がYESかNOで答え、判断した理由をグループで話し合っていく。参加者が主体的に状況を判断し、決断できるものになっている。

また、吉川・矢守・杉浦（2009）により、役所の職員に加えて、市民編や学校安全編などが作られている。本研究では、このクロスロードを防犯教育に取り入れ、「防犯クロスロード」として実践を進めていく。

#### （4）開発的防犯教育論

先行研究を整理していく中で、出てきた課題は予防と対処に終始する姿勢である。西（2017）は防災でも同じ視点の課題があると考え、倉本（2007）の開発的指導論を防災教育でも取り入れた「開発的防災教育論」を定義づけた。

吉田（2019）は、この開発的防災教育論を小学校における防犯教育で取り入れ、「開発的防犯教育論」として定義づけた。

本研究は、予防と対処にとどまらないという、西（2017）、吉田（2019）の考え方と合致することから、「開発的防犯教育論」を中学校の安全指導に合わせて研究を進めていく。

#### 第5節 認識の三段階連関理論

子ども向けの授業展開や教員向けの研修を考えるにあたり、これまでの経験から「体験することがより深い学びになる」と考えた。その裏付けとなっているのが、認識の三段階連関理論である（図8）。

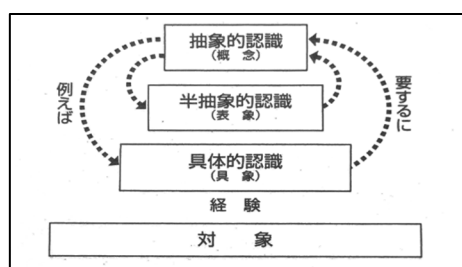


図8 認識の三段階連関理論

庄司（1989）や田中・佐藤（2013）の考えをもとにすると、分かるということも三段階から構成されており、「本当の分かる」とは経験を通して得られた認識のことを表している。経験を持たない認識は「分かったつもり」であるとされている。本研究は、「防犯」を対象としているため実際に犯罪に巻き込むことはできないものの、体験という経験であったり、言語によるコ

ミュニケーションを重ねたりすることで、「本当の分かる」に近づけていくことを想定している。

#### 第6節 理論研究を合わせた研究の全体構想図

先行研究と事例研究を総括して、本研究の全体構想を図9のようにまとめた。

研究の土台となる理論は「主に子どもに対して」の理論と「主に教員に対して」の理論、子どもと教員の両方に関わる理論がある。これらの理論にカリキュラムマネジメントの考えを合わせて実践を進めることで、子どもと教員の意識向上を図っていく。

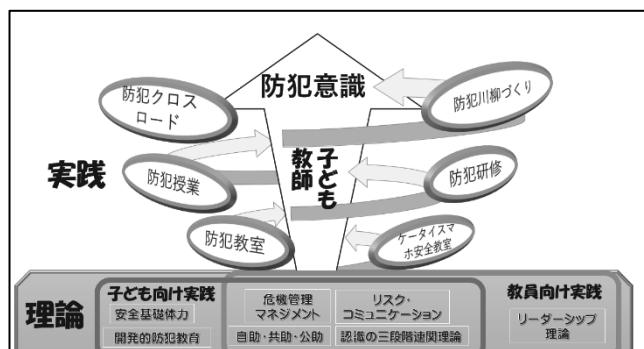


図9 理論と実践を含めた研究の全体構想図

### 第2章 研究（実践）の実際

#### 第1節 開発的防犯教育カリキュラム作り

研究を進めるにあたり、本校の防犯教育カリキュラムの整備を行った。学習指導要領に則り、安全教育の実施は各教科でも進めていくために、各教科担当の教員にも協力を依頼し、次ページの表2・3のようなカリキュラムを設定した。

しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症の広がりにより、新年度の開始が6月からになる等、例年にない状況となったため、本研究の実践は3年生（73名）の総合的な学習の時間を中心とした実践に絞って進めていくことにした。

#### 第2節 生徒を対象とした実践

##### （1）防犯教室（自助）

防犯教育のはじまりとして、愛知警察署生活安全課に協力を依頼し、防犯教室を実施した。ここでは「自助」を重視しつつ、「共助」「公助」の意識付けと中学生としての防犯に必要な体力の確認を行った。生活安全課との事前協議を重ね、本校の位置する地域で起こりやすい状況をもとに実践を進めることになった。

体力を確認する  
走って逃げる



つかまれた腕を振りほどく





表2 防犯教育で育てたい力（案）

学年	段階	目標	体の力					社会的な力				
			歩く	見る・聞く	叫ぶ	動く	走る	コミュニケーション力	大人力			
									自己選択力	自己決定力	自己責任力	発見力
中1	自助 共助	周囲の助力もあるが、自分の力で自分の安全を確かめることができる	明かりや植栽に注意しながら一人で夜道を安全安心に歩くことができる	前後左右から近づく音や人に注意を払える	安全のための拒否や援助等の声を出すことができる	危ないという判断に従い、反転・立ち止まる等の行動が的確にできる	手振り・叫ぶ等した後、20m走ることができる	時、場所、相手に応じたふさわしい会話と対応ができる	自分と友だちの安全確保のために問うべき行動を並べることができる	自分が友だちの安全確保のために取らねばならない役割をとっさに選べる	友だちのためにしたことは自分の役割であり、責任だと自覚できる	その場の様子から問題を見つけることができる
中2	自助 共助 公助	周囲の人の安全のために積極的に行動できる	友だちと会話しながらでも前後左右を意識して歩ける	相手の立場を理解しながら見聞きできる	「はい」「いいえ」と自分の意思で会話ができる	友だちが危ないことにあった時に、どう振舞えばよいのか判断できる	相手の面前から20m走り抜ける		地域の安全安心のために時として自分がとらねばならない行動を並べることができる	並べた方策のなかから1つ選び出し、行動することができる	人のためにすることは自分の責務であると自覚できる	
中3	自助 共助 公助	周囲の人の安全のために積極的に行動し、安全な環境づくりに働けることができる			50m先まで意味のある声と身振りを届けることができる	地域の人に危険がせまっている時に、どう振舞えばよいのか判断できる						

表3 開発的防犯教育カリキュラム案

	防犯関連行事	1年（自助・共助）				2年（自助・共助・公助）				3年（自助・共助・公助）			
		教科	道徳	特活	総合	教科	道徳	特活	総合	教科	道徳	特活	総合
4月	集団下校訓練 避難経路の確認 職員研修（防犯対策） PTA 総会（防犯講習）	【国語】 情報の取捨選択（ネット）	心と形		通学路の危険予想・回避学習				通学路の危険予想・回避学習				通学路の危険予想・回避学習
5月	防犯教室	【国語】 必要な情報を聞き取る	思いやりの心		不審者からの身の守り方				不審者からの身の守り方				不審者からの身の守り方
6月	生徒指導推進協議会	【保健】 思春期の心の変化への対応	家族の一員として			【国語】 メディアと上手に付き合うために	公正な社会のために				地域社会の一員として		
7月	職員研修（防犯教育）	【国語】 情報の集め方を知ろう		夏休みの生活について	自分ならどうする（登下校）	【保健】 犯罪被害の防止		夏休みの生活について	自分ならどうする（学校内）			夏休みの生活について	自分ならどうする（友人）
8月		【国語】 社会を明るくする運動作文				【国語】 社会を明るくする運動作文				【国語】 社会を明るくする運動作文			
9月	ケータイ・スマホ安全教室（1・2・3年）		誠実な行動	ネットモラルについて	自分ならどうする（学校内）	【美術】 ポスター作り（防犯）		ネットモラルについて	自分ならどうする（友人）	【国語】 社説を比較して読む		ネットモラルについて	自分ならどうする（家庭）
10月	薬物乱用防止教室（2年）	【家庭】 住生活と自立	ルールやマナーの意義			【家庭】 住生活と自立		薬物の危険性・回避学習	家族と家庭と地域	思いやりの心			自分ならどうする（地域）
11月				防犯川柳を作ろう	防犯クロスロード			防犯川柳を作ろう	防犯クロスロード	【技術】 情報ネットワークについて		防犯川柳を作ろう	防犯クロスロード
12月				冬休みの生活について		【家庭】 私たちの消費生活	家族の愛情	冬休みの生活について			家族の絆	冬休みの生活について	
1月			郷土の伝統や文化を受け継ぐ				気高く生きる			【社会】 よりよい社会を目指して			
2月	生徒指導推進協議会 職員研修（防犯教育の振り返り）				防犯教育の振り返り				防犯教育の振り返り	【理科】 科学技術と人間			防犯教育の振り返り
3月				春休みの生活について				春休みの生活について				卒業後の生活について	

## （2）ケータイ・スマホ安全教室（自助・共助）

近年増加しているインターネット上のトラブルの防止を目的にケータイ・スマホ安全教室を実施した。担当教員と講師との事前協議を経て、自分自身がトラブルに巻き込まれないようにする「自助」、友人とのトラブル防止や家族の個人情報を守る「共助」の意識を育てる目的とし、内容の中心を SNS の利用する際の注意（写真など個人情報の扱い）とネットを介した犯罪への注意の2点に絞ることにした。

## （3）防犯授業（自助・共助）

これまでの実践で自助の高まりが出てきたので、この実践での目的を「共助の意識をより高めること」と「状況に応じた選択肢を作り出す力・選択肢を決定する力を高めること」とした。

設定された状況の中で、どのような選択肢（行動）があるのか、また、どの選択肢（行動）がより適切かを判断する力、すなわち「大人力」を高める活動をグループで行った。

#### 【防犯授業での設定】

あなたは中学3年生のBくんです。ある日の休日、友人のCくんとあなたの2人でショッピングモールに遊びに来た。夕方になり、あなたは帰ろうとCくんに話したが、Cくんはどうしてもゲームセンターに行きたいと言い張り、仕方なく付き添うことにした。あなたは飲み物を買うためにCくんと一度離れ、Cくんのもとへ戻ると、Cくんが数名の見知らぬ男性に囲まれている。Cくんの表情からは恐怖や困った様子が伺える。

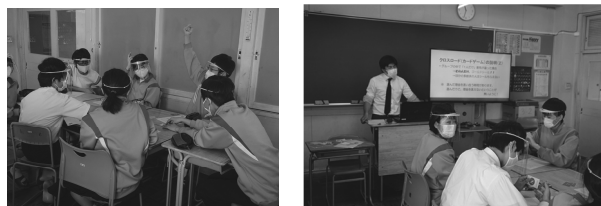
この後、Bくんはどのような行動をするだろうか。理由も考えてみよう。

#### (4) 防犯クロスロード (自助・共助・公助)

これまでの自助・共助・公助の視点に加え、安全基礎体力を総合的に伸ばす目的で「防犯クロスロード」の実践を行った。防犯クロスロードの基本設定は、吉川・矢守・杉浦（2009）による学校安全の設定に加え、本校と中学校3年生の状況に合わせて独自に開発した設定を使用した。実践では、モニターに写した設定をグループで考えさせた。YES/NOのカードは学級全体で同時に確認させ、その後はグループ内で理由や意見を話し合う時間を作った。

あなたは	基本設定	引用
中学3年の級長	授業中、となりの教室に刃物を持った不審者が侵入した。あなたの学級担任Aは隣の教室の不審者に対応するために指示を出さずに行ってしまった。クラスの皆は不安で動けないでいる。あなたが級長として出す指示はどちら？ Yes…自分たちで避難しよう No…この場で先生を待とう	独自開発
中学3年の生徒	受験が近づく1月の終わり、地域の自治会からあなたに連絡があった。 「地域の課題を見つけるために3月までの毎週土曜日に地域と一緒に歩いて回ってほしい。」あなたは毎週協力をする？ Yes…協力する No…協力しない	独自開発

防犯クロスロードに取り組む様子



#### (5) 防犯川柳づくり (自助・共助・公助)

これまでの防犯に関わる授業や学びを振り返り、そのまとめとして「これまでの学びを生かした防犯川

#### 【生徒作品】

##### 「防ぐには みんなで手を取り 助け合おう」

一人では防げないことも共助することで防ぐことができる。

##### 「あなたの選択が 自分を守る 誰かを助ける」

様々な選択がある中で自分が判断したことが、自分を守ること、誰かを助けることにつながる。

##### 「犯罪に 遭わず 遭わせず 巻き込ませず」

「自助」という観点で遭わない、「共助」という視点で遭わせない、「公助」という視点で巻き込ませない社会にしていこうという思い。

柳づくり」を行った。

### 第3節 教員を対象とした実践

#### (1) 防犯講習会

職員室内の会話や事前アンケートにより、さすまたや防犯用品の使い方が分からない若手教師がいることが明らかとなったことで、講習会を行うことにした。愛知警察署に依頼をし、担当者と事前協議を経て、不審者侵入を想定した8月に実施した。警察との話し合いを重ね、以下の3点のロール・プレイにより校内の連携体制の確認とさすまたの使い方の講習を行うことにした。

【設定1】授業中、2階廊下を歩いていると正面から男性が歩いてくる。保護者証を付けていないため、保護者という確証はない。どのように声をかけて対応すればいいのか。

【設定2】授業中、1階の3の1の教室に男性が教室前方の窓から侵入してきた。男性は刃物を所持しており、生徒・教員に対して危害を加える可能性が非常に高い。生徒・教員の安全を確保し、生徒を避難させるためには、どのように対応すればいいのか。

【設定3】休み時間、2階廊下に男性が侵入した。男性はコロナウィルスの陽性者らしく、ウィルスを巻き散らすと騒いでいる。感染症の広がりを予防しつつ、どのように対応すればいいのか。

防犯講習会に取り組む様子



## (2) 防犯クロスロード

防犯講習会により、不審者侵入に対しての具体的なイメージや連携体制の動きを確認できたところで、講習会では扱えなかった状況を想定した教員用の防犯クロスロードの実践を模擬授業という形で行った。扱った基本設定は、生徒向けの実践と同じく、吉川・矢守・杉浦（2009）による学校安全の設定に加え、本校の状況に合わせて独自に開発した設定を使用した。

あなたは	基本設定	引用
授業担任	<p>不審者が複数学校に入ってきたという情報が伝わってきて学校中パニック状態。すぐ教室の子どもを避難させる？</p> <p>YES：避難させる</p> <p>NO：避難させない</p>	資料から引用
教務主任	<p>校長・教頭が不在の中、下校前に隣の校区に刃物を持った不審者が出たという情報が入った。子どもに注意を呼び掛ける指導を学級担任に行かせたが、子どもを下校させる？</p> <p>YES：下校させる</p> <p>NO：学校で待機させる</p>	独自開発

防犯クロスロードに取り組む様子



## 第3章 実証・考察

## 第1節 生徒の意識変化

以上の実践を実証・考察するにあたり、事前・事後のアンケート（選択式と自由記述）と実践ごとの感想（自由記述）による量的・質的検証を行う。

### (1) 量の検証

量的検証では、事前調査として令和2年4月に、事後調査として令和2年11月に本校3年生徒を対象としたアンケートを行った。アンケートの質問項目は吉田（2019）、西（2017）、渡辺（2017）が実施したアンケートをもとに作成した（表4）。

全体の平均点で指導前の 3.4 から指導後の 3.85 に変化していることが明らかになった。指導前の平均点と指導後の平均点の差が統計的に有意か確かめるために、有意水準 5% で両側検定の t 検定を行ったところ、 $t(19) = -7.94$ ,  $p = .000$  で  $p < .01$  であり、指導の前後の平均点の差は有意であることがわかった。

アンケートの結果から今回の実践では、すべての項目において数値の上昇が見られた。また、項目の平均値の変化を見ると、変化が大きかったのが「今の自分」「知識」「緊急時」「これまで」の4つが挙げられる。防犯教育を計画的に実施したことで、生徒の防犯知識や防犯意識に向上が見られたと考えられる。

特に大きく変化したのが設問2であり、本実践が防犯を学ぶ生徒の達成感につながったといえる。そして、設問14・15・16では、大きく数値の伸びがあり、「自助・共助・公助」についての意識が高まったと言える。

また、設問 17・18・19 の変化は、防犯教育に開発的な視点を取り入れたことで、生徒の自尊感情の高まりがあったと推測できる。

表4 生徒アンケート結果

項目	アンケート内容	平均値			項目間平均値		
		4月	11月	変化	4月	11月	変化
防犯教育	1 犯罪の被害を減らすためにも学校で防犯についての学習には大切だと思う。	4.46	4.61	0.157	4.21	4.45	0.245
	2 学校で、防犯についての学習を十分にしていると思う。	3.06	3.97	0.914			
	3 防犯についての学習で、自分を守るようになることは大切だと思う。	4.70	4.79	0.086			
	4 防犯についての学習で、家族や友達など周りの人を守るようになることは大切だと思う。	4.61	4.69	0.071			
	5 犯罪の被害を減らすために、中学生として地域に貢献することは大切だと思う。	4.11	4.29	0.171			
	6 学校で学んだことを、地域の人を助けられるなど生かしたいと思う。	4.31	4.39	0.071			
今の自分	7 自分が犯罪に巻き込まれないようにするための行動を学んでいる。	3.39	4.04	0.657	2.92	3.58	0.661
	8 犯罪が起きた時に自分を守るための行動を学んでいる。	3.17	3.94	0.771			
	9 犯罪が起る時に備えて、家族や友達など周りの人を守るための行動を学んでいる。	3.03	3.77	0.743			
	10 犯罪を減らすために、注意を呼び掛けるなど、地域の一員として行動し、貢献していると思う。	2.10	2.57	0.471			
知識	11 これも110番の家を知っている。	3.29	3.84	0.557	3.42	3.84	0.424
	12 どのような人が怪しい人なのか知っている。	3.37	3.81	0.443			
	13 どのような場所では犯罪が起きやすいのかわ知っている。	3.60	3.87	0.271			
緊急時	14 方がーの緊急時に、防犯についての学習で学んだ知識や技能を生かして自分を守ることができそうだ。	3.09	3.50	0.414	2.92	3.42	0.505
	15 方がーの緊急時に、防犯についての学習で学んだ知識や技能を生かして家族や友達など周りの人を守ることができそうだ。	2.91	3.46	0.543			
	16 方がーの緊急時に、防犯についての学習で学んだ知識や技能を生かして地域の人を守るために行動することができそうだ。	2.76	3.31	0.557			
これまで	17 防犯についての学習の中で、最も地域の人から自分の行動や学習の姿勢をほめられたことがある。	2.07	2.64	0.571	3.03	3.56	0.529
	18 これまでの防犯の学習で、自分が大切にすること（自決力の気持ち）が育ったと思う。	3.30	3.80	0.500			
	19 これまでの防犯の学習で、思いやりの心（共助力の気持ち）が育ったと思う。	3.40	3.86	0.457			
	20 これまでの防犯の学習は、これからも防犯について（親）と学習し続けたい。	3.34	3.93	0.586			

## (2) 質的検証

(ア) 生徒アンケート自由記述

事前・事後のアンケートの自由記述を KHcorder にて最小出現数を 5 に設定し、対応分析にかけた（図 10）。

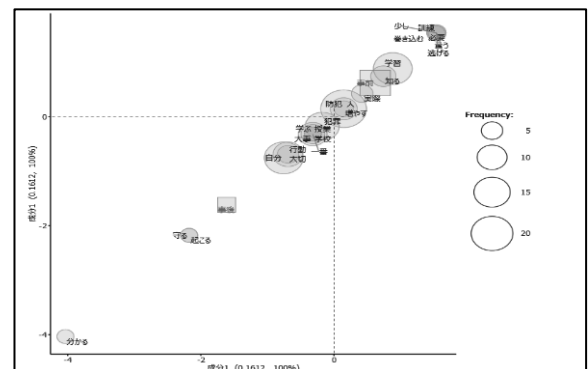


図 10 アンケート自由記述対応分析

事前の自由記述の特徴として「知る（知りたい）」、

「逃げる」という語句が特徴的な言葉として出てきたことに対し、事後の自由記述では、「分かる」、「守る」という語句が特徴的な言葉として表れている。本実践を行ったことにより、子どもの中で経験として分かることが増えたと考えられる。どちらにも共通する語として、自分という語句が出てきており、自分で守る（自助）、自分が守る（共助・公助）といった学びが影響を与えていると考えられる。

### (イ) 防犯教室

実践後の生徒の感想を KHcoder にて最小出現数を 5 に設定し、対応分析にかけた（図 11）。

対応分析の結果として、「自分」「不審者」「犯罪」という言葉の出現数が多いことが挙げられる。そして、「警察」「危ない」という言葉が特徴的な言葉として挙げられる。これまで、防犯について学ぶ機会の少ない生徒にとって、警察官からの話や身を守る練習を行うことで、犯罪や不審者の発生が他人事ではなく、自分事として捉えることができたと考えられる。

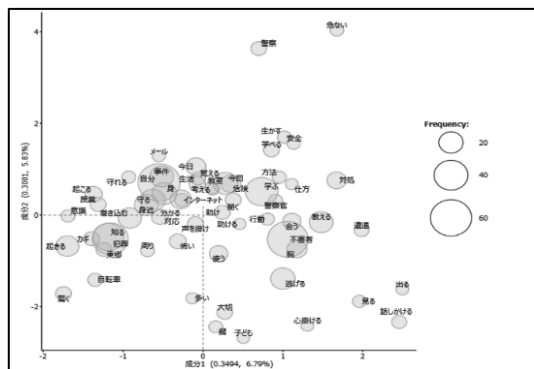


図 11 防犯教室感想対応分析結果

また、記述内容の関係性を捉えるために、同じものをクラスター分析にかけた（図 12）。

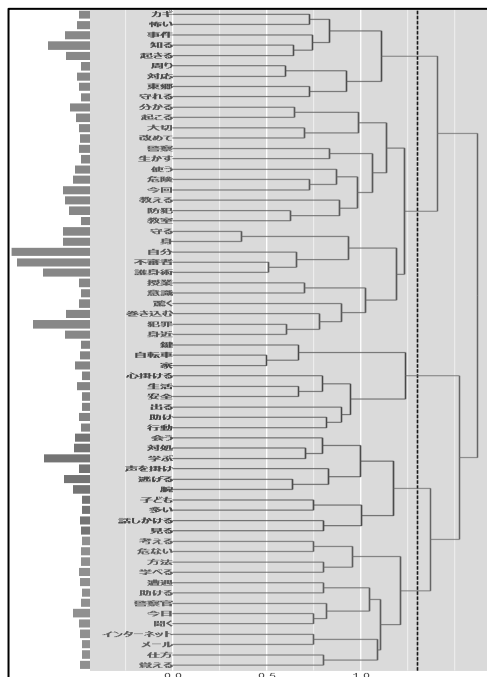


図 12 防犯教室感想クラスター分析

クラスター分析の結果で特に注目したのは、第 2 と 4 のクラスターである。第 2 のクラスターでは、「自分」「不審者」「護身術」「犯罪」といった言葉が出てきている。身近に起きている犯罪から自分の身を守るために、今回の防犯教室で教えてもらった護身術を生かしていきたいと生徒が考えたと言える。第 4 のクラスターでは、「学ぶ」「逃げる」「子ども」といった言葉が出てきている。子どもは不審者から話しかけられたり、見られたりすることが多く、これに対処する方法として、まずは自分が逃げることを学んだと言える。つまり、これらの感想は「自助」の意識の表れであり、「自助」の意識を高める実践としての効果があったと考えられる。

### (ウ) スマホ・ケータイ安全教室

実践後の生徒の感想を KHcoder にて最小出現数を 7 に設定し、対応分析にかけた（図 13）。

対応分析の結果として、「自分」「SNS」「スマホ」「使う」という言葉の出現数が多いことが挙げられる。そして、「注意」「言葉」という言葉が特徴的な言葉として扱われている。

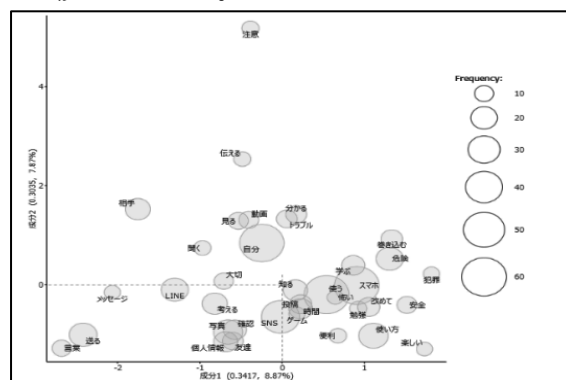


図 13 スマホ・ケータイ安全教室感想対応分析

生徒自身がスマホを利用していることもあり、自分事として捉えやすかったと考えられる。また、記述内容の関係性を捉えるために、同じものをクラスター分析にかけた（図 14）。

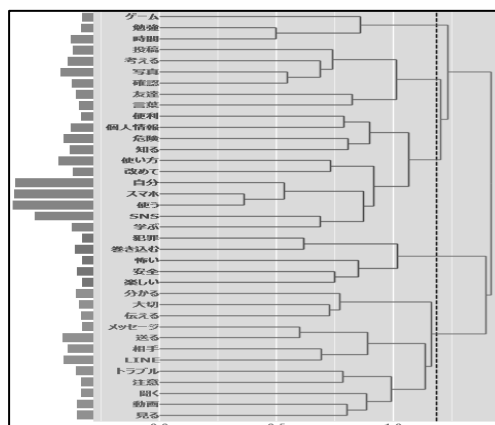


図 14 スマホ・ケータイ安全教室感想クラスター分析

この分析で特に注目すべきは、第 2・3 のクラスターである。第 2 のクラスターでは、「写真」「投稿」「言

葉「友達」といった言葉が出てきている。インターネット上に写真を投稿したり、友達へ言葉を送ったりすることに注意をしようという思いが高まったと言える。第3のクラスターでは、「自分」「便利」「スマホ」「SNS」「学ぶ」といった言葉が出てきている。自分のこととして、スマホは便利である一方で、使い方を間違えたときの危険性を理解し、正しい使い方を学ぶことができたと言える。

### (エ) 防犯クロスロード

防犯クロスロードでは、実践中の子どものグループでの会話を録音し、それを文字に起こした資料をもとに愛知教育大学教職大学院の浅田、大岩、杉浦と検証を行った。

生徒の発言を見ると、相手の意見を受け、「でも、〇〇ではないか」という意見を重ねていく発言や「それもある」、「なるほど」という共感的な発言が随所に見られ、クロスロードによる発言の重層性が現れた。また、「自分たちで避難をすることで、警察を呼べる」、「地域の役に立てるのがいい」というように共助や公助の内容を含む発言が見られ、生徒の中で、自助・共助・公助による防犯意識の高まりがあったと考える。

自分なりにできることを考えることが中学生の取り組むべき防犯教育であり、自分が直接助けに行くのではなく、大人を呼びに行くことが間接的に助けることになるのではないかと揺れ動く考えがでていることが学びの場として適切であったと言える。

## 第2節 教員の意識変化

### (1) 量的検証

量的検証では、事前調査として令和2年3月に、事後調査として令和2年11月に本校の教員を対象としたアンケートを行った。アンケートの質問項目は生徒のアンケートと同様に吉田(2019)、西(2017)、渡辺(2017)が実施したアンケートをもとに作成した(表5)。

全体の平均点で指導前の3.27から指導後の3.71に変化していることが明らかになった。指導前の平均点と指導後の平均点の差が統計的に有意か確かめるために、有意水準5%で両側検定のt検定を行ったところ、 $t(21) = -3.70$ ,  $p = .001$ で $p < .01$ であり、指導の前後の平均点の差は有意であることがわかった。

項目平均値でみると、大きく変化しているのが、「諸輪中の現状の防犯教育」であることが分かる。これは防犯教育のカリキュラムを整備し、計画的に防犯教育を進めていったことが影響していると考えられる。その一方で、変化が少ない「防犯教育」や「全般」の項目がある。本年度の実践の中心となる取り組みが3年生の生徒に限定したため、生徒の防犯意識は高まったと感じつつも、実践のねらいとする価値までは教員全体へ広がらなかったことと推測できる。

表5 教員アンケート結果

項目	番号	内容	平均値			項目平均値		
			3月	11月	変化	3月	11月	変化
自分自身	1	不審者が学校に侵入したときに、自分がどのように対処すればいいのかわかる。	3.21	3.96	0.75	3.35	3.93	0.59
	2	不審者が学校に侵入したときに、周囲の教員にどのように指示を出せばいいのかわかる。	2.63	3.50	0.87			
	3	学校にある防犯グッズ(さすまた等)の場所を知っている。	4.37	4.54	0.17			
	4	学校にある防犯グッズ(さすまた等)の使い方を正しく知っている。	3.74	4.13	0.39			
	5	日頃から防犯意識をもって、教育活動に取り組んでいる。	2.79	3.54	0.75			
防犯教育	6	生徒は、中学生としての防犯意識をもっていると思う。	2.11	3.04	0.94	4.06	4.20	0.14
	7	犯罪発生時に生徒は自分の命を守る「自助力」を高めていると思う。	4.79	4.72	-0.08			
	8	犯罪発生時に生徒は自分の安全を確保した上で、家族や友達を助ける「共助力」を高めていると思う。	4.53	4.46	-0.07			
	9	犯罪発生時に生徒は自分の安全を確保した上で、地域の人も助ける「公助力」を高めていると思う。	4.36	4.38	0.01			
	10	防犯教育の実施にあたり、警察や保護者などの地域との連携が必要だと思う。	4.66	4.67	0.00			
	11	防犯教育の実施にあたり、地域への生徒による学びを生かした活動が必要だと思う。	3.91	3.92	0.01			
	12	今、諸輪中学校で行われている防犯教育で、生徒の「自分を守る心」が育つと思う。	2.68	3.29	0.61			
諸輪中の現状の防犯教育	13	今、諸輪中学校で行われている防犯教育で、生徒の「思いやり」が育つと思う。	2.58	3.25	0.67	2.16	2.99	0.83
	14	諸輪中学校の防犯教育では、各教科の学びが授業で生かされていると思う。	1.95	2.92	0.97			
	15	諸輪中学校の防犯教育では、学年で系統立てた防犯教育が行われていると思う。	1.68	2.63	0.94			
	16	諸輪中学校の防犯教育では、自助力(自分を守る力)を高めている授業が行われていると思う。	2.16	2.96	0.80			
	17	諸輪中学校の防犯教育では、共助力(家族や友人を守る力)を高めている授業が行われていると思う。	2.16	2.96	0.80			
	18	諸輪中学校の防犯教育では、公助力(地域の人を守る力)を高めている授業が行われていると思う。	1.89	2.92	1.02			
	19	学年や学級の壁を超えて、全職員で生徒を育てようとする雰囲気があると思う。	3.84	3.88	0.03			
全般	20	普段の職員同士の会話で、生徒の学習面や生活面について意識を高め合っていると思う。	4.42	4.25	-0.17	3.96	3.99	0.03
	21	教師間でそれぞれの個性を認め合い、専門性を高めようとする雰囲気がある。	3.84	3.92	0.07			
	22	教務分掌や学年の仕事において、お互いに助け合っていると思う。	3.74	3.92	0.18			
	23	防犯に関わる現職研修は、学校全体で共有する有益な知識(知恵)を作り出していると思う。	3.21	3.21	0.00			
研修・体制	24	防犯に関わる現職研修で学びを自分の教育に生かしていると思う。	3.88	3.88	0.00	3.13	3.13	0.00
	25	防犯に関わる現職研修により、校内の防犯体制が機能するようになったと思う。	3.10	3.10	0.00			
	26	防犯に関わる現職研修により、校内の組織改善が進められたと思う。	2.31	2.31	0.00			

### (2) 質的検証

#### (ア) 教員アンケート自由記述

事前・事後のアンケートの自由記述を KHcoder にて最小出現数を2に設定し、対応分析にかけた(図15)。

事前の自由記述の特徴として「イメージ」や「機会」といった語句が特徴的な言葉として出てきたことに対し、事後の自由記述では、「実践」、「難しい」という語句が特徴的な言葉として表れている。実践前はイメージがもてない、機会が少ないという感想をもった教員も、事後には実践を継続したい、教えることの難しさを感じたというように経験を積んだことによる変化が見られた。また、事後に近いところには「教える」という子どもに対しての言葉も出てきており、今後の防犯教育への意欲につながっていると考えられる。

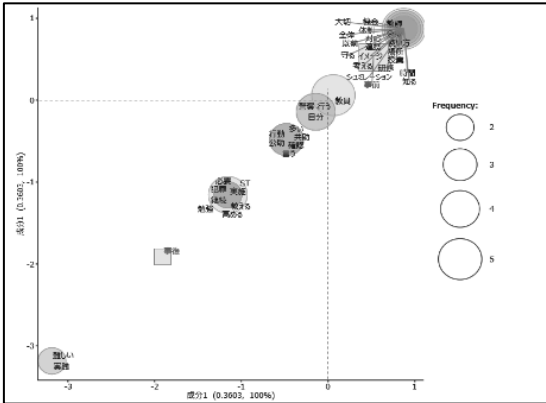
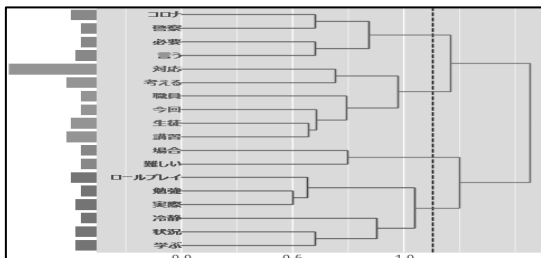


図15 教員アンケート自由記述対応分析  
(イ) 防犯講習会感想

防犯講習会の感想を KHcoder にて最小出現数を3に設定し、階層的クラスター分析にかけた(図16)。

この分析からは、コロナ感染者が侵入したロール・

第4のクラスターでは、冷静な判断を行う練習になったというロール・プレイの効果が伺うことができる。



### (ウ) 防犯クロスロード感想

この分析からは、教員自身も防犯クロスロードのゲーム性を楽しみつつも判断の難しさ、人の意見を聞くことの大切さを感じており、各々の教員の今後の実践に生かせるという見通しをもったと考えられる。

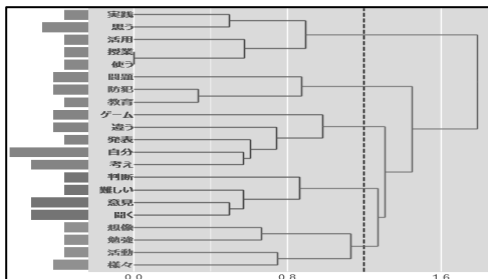


図 17 防犯クロスロード感想階層的クラスタ分析

## 第1節 研究の成果

1 点目が、「自助・共助・公助」の視点と防犯教育のつながりによって、子どもの防犯意識の向上につながったことである。中学3年生という立場の子どもたちにとって、守られることは重要であるものの、自助としての「自分の身は自分で守る」だけでなく、共助や公助としての「自分たちでもできることがある」「安全はみんなで作り上げていくもの」という意識をもたせることができた。さらに実践を通して、「どうすればいいのか」という判断・決断させることまで至ったのは、確実な前進であった。また、防犯教育を通して、子どもたちの活動や考えを認め、地域への貢献を意識させることで、自尊感情を高めることができたと言える。

## 第2節 研究の課題

今後の研究の課題として、①小中連携、②犯罪の多様化に合わせた実践内容の改善が挙げられる。以下にその2点を示す。

- ① 本研究では、コロナ禍により中学3年生のみを対象として、防犯意識を高めてきた。しかし、防犯教育は安全基礎体力を含め、中学校だけでなく小学校からの積み重ねが必要であると考え。今後は、地域の特性を踏まえた小中連携による防犯教育のカリキュラム作成の必要性があらう。
- ② 中学生という発達段階を考慮した開発的防犯教育をすすめた本研究は他地域、他校での転用ができる内容であると言える。しかし、昨今の犯罪の多様化に対応するためには、実践の内容のさらなる改善を継続的に行っていく必要があらう。

以上を総括して、自身の理論構築力・実践力・実証力のさらなる向上を課題とし、防犯教育の改善を図っていきたい。

## 参考文献·资料

- 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領』  
文部科学省(2018)『学校の危機管理マニュアル作成の手引』  
文部科学省(2006)『学校における防犯教室等実践事例集』  
文部科学省(2007)『学校の危機管理マニュアル子どもを犯罪から守るために』  
橋本貴充・荘島宏二郎(2016)『実験心理学のための統計学：t検定と分散分析』誠信書房  
厚生労働省『厚生白書』平成12年版  
倉本哲男(2007)『開発的生徒指導論と学校マネジメント』ふくろ出版  
西弘満(2017)『開発的防災教育カリキュラムの編成に関する研究～SLの視点から～』  
渡辺淳(2017)『学校防災力を高めるための研究一避難所開設マニュアルの作成を通して』  
吉田光男(2018)『防犯意識を高めるための研究一段階別安全教育カリキュラムづくりと開発的防犯教育』  
清永奈穂(2013)『犯罪と地震から子どもの命を守る！』小学館  
清永賢二(2012)『犯罪からの子どもの安全を科学する「安全基礎体力」づくりをめざして』ミネルヴァ書房  
庄司和晃(1989)『認識の三段階連関理論』季節社  
田中正博・佐藤春雄(2013)『教育のリスクマネジメント』時事通信社  
河野英太郎(2019)『管理職のリーダーシップ再考』独立行政法人教職員支援機構  
矢守克也・吉川肇子・網代剛(2005)『ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション：「クロスロード」への招待』ナカニシヤ出版  
吉川肇子・矢守克也・杉浦淳吉(2009)『クロスロード・ネクスト 続：ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション』ナカニシヤ出版